

那須塩原市観光活性化座談会

豊かな自然と食材、好アクセス



藤田 一彦氏

本物がたくさんある 100選ランクインが励み 観光素材磨き上げに力を

那須塩原の魅力 観光施策

那須塩原市の観光魅力は何だろうか。ひとつは、自然と食材。もう一つは、好アクセス。山がちな自然と、豊富な食材。そして、好アクセス。山がちな自然と、豊富な食材。そして、好アクセス。

本下 一番の魅力は塩原、板室の温泉情緒。首都圏の近くで、古き良き時代の温泉地の雰囲気が残っているのは素晴らしい。ハラルの影響を受けなかったのが大きい。大規模旅館もなく、こじんまりとした旅館が大半だが、落ち着いた雰囲気で、奥に入れば秘湯的な温泉地もある。また、日本には10種類の泉質があるといわれるが、ここではそのうちの6種類がある。自然も豊かで、四季折々の山や溪谷の美しさは格別。また、酪農や畜産、高原野菜など食材も豊富。さらにアクセスも良く、東京から新幹線でわずか1時間強という近さ。これは大きな魅力だ。

若色 首都圏、特に東京をターゲットとしていることを考えた時、新幹線で1時間強で来れるというのは大きな強みだ。働き方改革が叫ばれているが、仕事が終わってから「温泉でも行こうかな」と思う時に塩原、板室はまさにピッタリ。栃木県那須塩原市が観光資源の磨き上げに努めている。市と観光局、観光事業者が一体となって積極的な観光プロモーションや四季折々のイベントを実施している。観光経済新聞社主催の「こぼんの温泉100選」では、塩原、板室両温泉のランクが毎年アップし、その効果が如実に表れている。市の観光をリードする5氏にお集まりいただき、市の観光の現状と課題を話し合っていた。関谷にある那須塩原市観光局で。

下がついてしまう(笑)。これではいけない。自信を持ってお勤めしないと次に来るとはならない。最近若い経営者を中心に、良い所を見つめ直して、もっとアピールしようという姿勢も始めている。市にとって観光の位置づけはどうか。

■ 藤田 観光は裾野の広い産業で、各方面に波及効果はとも大い。市の知名度を上げる最も有効な手段は観光で人を集めること。そういう意味では、観光は市政にとって極めて重要なポジションといえる。移住先先としての市をPRしているが、その先導役を果たす産業でもあるわけだから、職員もそういう意識を持って観光振興に取り組んでいる。観光局は観光施策の実行部隊といえるが、4月には一般社団法人に移行した。業務範囲はますます広がった。

■ 藤田 温泉自然食ハブなど、本物をたくさんある。特に、温泉街は木下局長が指揮されたように、情緒が色濃く残っている。子どもの頃から温泉に入っている。子どもの頃からの温泉に入ったこと。原の飲用水や灌漑用水確保のため日本三大疎水である。那須塩原水が整備され、那須野が原華族などによる大農業が整備された結果、松方正義や大山巖、乃木希典といった明治の元勳ゆかりの建物などがある。また、塩原用邸があった。天皇の間も原型のまま保存されている。文豪の足跡も残っている。

■ 藤田 年間入り込み数はほぼ1千万人で、宿泊客数は100万人。多彩な温泉楽しめる。奥塩原温泉は「玄人」向けブランド力向上を目指す。



大塚 建一氏

色鮮やか秋の紅葉

宿泊者限定のバスツアー実施

那須塩原市の魅力は温泉だけではなく、秋ともなると紅葉が山一面を彩る。観光客から思わぬため息が漏れるほどの美しさで、紅葉目当てで毎年訪れる観光客も少なくない。紅葉を心ゆく楽しんでおと、宿泊者限定の「平日紅葉バスツアー」が実施される。見所をよく知る旅館・ホテルのスタッフが日替わりでガイドを務める。コースは2つ。まず、10月6、16日に実施されるのが「沼津原



板室温泉の見事な紅葉

■ 藤田 観光局は観光施策の実行部隊といえるが、4月には一般社団法人に移行した。業務範囲はますます広がった。

わが温泉自慢 PREDCの成果

若色さん、山口さん、大塚さんの温泉地はそれぞれ場所が異なるが、特徴は何だろうか。

■ 若色 塩原の中でも、うちは中塩原温泉地区である。泉質はどれもマイルドで、温泉に慣れない子どもから大人まで楽しめる。もう一つの特徴は温泉街からちょっと離れたところに、隠れた秘湯がある。

■ 大塚 エプロンが1年で壊れたり、テレビも1年で壊れたり。設備投資にお金がかかって仕方ない(笑)。



箒川沿いにある塩原温泉の露天風呂

■ 藤田 奥塩原は硫黄温泉のひなびたイメージがあるが、大塚さんの施設は垢抜けた雰囲気がある。

■ 大塚 旅館然とした雰囲気ではないので、イメージが違っているとよく言われますね。

■ 山口 杖をたいていたおばあちゃん、帰る時には杖をたいていたという話がある。「杖忘れの温泉」といわれる所だが、私自身、実際、そう感じている。最近ではベストな泊まれる宿売りの物にする旅館も出てきており、温泉地の形勢が少しずつ変わってきている。観光地としてこれらから振

■ 山口 杖をたいていたおばあちゃん、帰る時には杖をたいていたという話がある。「杖忘れの温泉」といわれる所だが、私自身、実際、そう感じている。最近ではベストな泊まれる宿売りの物にする旅館も出てきており、温泉地の形勢が少しずつ変わってきている。観光地としてこれらから振